

日中韓における社会系教科教育課程の構造とその特質

— 初等カリキュラムの比較を通して —

蔡 秋 英

(2009年10月6日受理)

The Essential Qualities Designing Social Studies' Curriculums
in Japan, China, and South Korea:
Comparing the Curriculum in Elementary Education

Qiuying Cai

Abstract: Today, Citizenship education is emphasized strongly in East-Asia. It is also centered on social studies. In this article, it is aimed to inquiry of the essential qualities designing social studies' curriculums in Japan, China, and South Korea where are represented nations in East Asia. I, therefore, analysis and compare the aims, scopes, sequences, and approaches of teaching three curriculums; Curriculum Guideline (2008) of elementary in Japan, Curriculum Standard of China (2001), and Curriculum Standard of South Korea (2009). Result of the analysis, each curriculums are designed characteristically on the aims, scopes, sequences.

Key words: a subject affiliated with social studies, an elementary curriculum, citizenship, comparative education

キーワード：初等社会系教科，初等カリキュラム，公民的資質，比較教育

I. 問題の所在

現在、ヨーロッパの国やアメリカでは、激しく変化している21世紀の社会に対応できる社会の構成員として、公共生活に責任を果たして自ら考え行動しようとする公民を育成するためにシティズンシップ教育の重要性に目を向けようとしている。これは、東アジアの国や地域においても例外ではない。そこで、学校教育において小・中・高校の各教科カリキュラムの改訂が世界的な規模で盛んに行われている。その中で、社会系教科はシティズンシップ教育を行う中心的役割を果たしている。では、東アジアの国や地域で、シティズンシップ教育のための社会系教科教育課程はどのような特質を持っているのか。本研究では、このような問題意識に基づいて、東アジア地域の主な国である日本と中国及び韓国に限定して、小学校に焦点を当てて、

最新の初等社会系教科教育課程の比較を行う。そして、比較を通してそれぞれの国の社会系教科教育課程の構造と特質を明らかにしていきたい。

本研究で取り上げる最新の初等社会系教科教育課程は、日本の場合、文部省告示の「小学校学習指導要領（社会編）」（2008年3月）であり、中国の場合、教育部告示の「全日制義務教育品德与社会課程標準（実験稿）」（2002年6月）であり、韓国の場合、教育科学技術部告示の「社会科教育課程」（2007年4月）である。これらは、日本の場合、平成11年版学習指導要領を改訂して平成20年3月に告示した新学習指導要領¹⁾であり、中国の場合、2001年から始まった基礎教育課程改革により、元の「社会」科と「思想品德」科が統合され新しく生まれた教科「品德与社会」の課程標準²⁾であり、韓国の場合、1997年の第7次教育課程を改訂し、2007年に告示された改訂社会科教育課程³⁾である。

| | | | | | | | | | | | | |
|------|---------------------------------|--|-------------------|------------------|--------------------------|-------------------|-------------------|------------------|---------------|----------------|---------|------|
| 高等学校 | 地理歴史科 世界史、日本史、地理 | | 公民科 現代社会、政治・経済 | | 思想政治 経政文哲、生生化生、活活活活 | 歴史 政経文、治済化、史史史 | 地理 自人文、区然文、地地地 | 社会 法政経社、と社治済化 | 韓世経韓、国界地地、文化史 | 東ア、世界、東ア、歴史の理解 | 現代生活と倫理 | 伝統倫理 |
| | 公民的分野 社会的、地理的、歴史的分野 | | 道徳 [社選、会] | 思想品徳 | 歴史と社会(一)(二) (或は歴史、地理) | | 社会 | 歴史 | 道徳 | | | |
| | 社会科 (105), (100), (90), (70) | | 道徳 (35) | 品徳と社会 (74~95) | | 社会 (102) | 道徳 (34) | | | | | |
| 中学校 | 生活科 | | 道徳 | 品徳と生活 | | 賢い生活 | | 正しい生活 | | | | |
| | 日本の社会系教科の構造 | | 中国の社会系教科の構造 | | | | 韓国の社会系教科の構造 | | | | | |

注：(1) 中国の場合、高等学校は必修科目のみで、選択科目は略した。韓国の場合、教育課程は国民共通基本教育課程（第1～10学年）と高等学校選択中心教育課程（第11～12学年）からなっている。後者は、普通教科と専門教科からなっているが、ここで示したのは普通教科のみである。

(2) 網掛け部分は小学校の場合である。

(3) () 内の数字は年間総時間数である。日本の場合、年間34週を基準とし、1時間数は45分である。中国の場合、年間35週を基準とし、年間総時間数1050時間の7～9%であることから計算したものである。1時間数は40分である。韓国の場合、年間34週を基準とし、1時間数は40分である。

平成20年告示（小・中）、平成20年（案）（高）学習指導要領（日本）、教育部『基礎教育課程改革綱要（試行）』（2001年）（中国）、教育人的資源部「初・中等学校教育課程総論（教育課程資料）」（2007年）（韓国）、より筆者作成。

図1 日本・中国・韓国の社会系教科構造の比較

日本、中国と韓国の学校教育制度は形式上ほぼ同じであり、初等カリキュラム、またそれを組む基準は国定となっている。それが、スタイルは多少の違いが見られるが、それぞれの網羅する中身としては、全体目標、或いは各学年や単元の目標とその内容、そして内容の取り扱いなど、ほぼ同じである。

そのため、以下では主にそれぞれの国の初等社会系教科¹⁾教育課程の全体構造、教科目標、内容、学習方法についての比較を行っていきたい。

II. 日中韓の社会系教科教育課程の構造

1. 日中韓の社会系教科の構造

まず、日中韓の社会系教科の構造を示したのが図1の通りである。

図1に示すように、3つの国の小学校社会系教科（網掛け部分）は小学校6年制という学校教育制度の下で、

第1～2学年では「生活」、第3～6学年では「社会」の系統として設置されていることがわかる。しかし、日本と韓国の場合、「生活」と「社会」は「道徳（韓国の場合は「正しい生活」）」と併置構造として設置されているのに対して、中国の場合、「品徳（道徳）と社会」のように融合された構造として設置されていることがうかがえる。

また、その年間総授業時間数から見ると、中国の場合は、「道徳」と「社会」という2つの領域が融合されていながらも、日本や韓国より少ないことが読み取れる。それ以外、日本の場合は学年が上がることによって授業時間数を少しずつ増やしていることがわかる。

次に、日中韓の初等社会系教科教育課程の全体構造を示すと次頁の表1のとおりである。

表1から見られるように、日本の場合、教科目標、各学年の目標と内容（目標、内容、内容の取り扱い）、指導計画の作成と各学年の内容の取り扱いからなっ

表1 日本・中国・韓国の初等社会系教科教育課程の比較

| 日本(第3～6学年) | 中国(第3～6学年) | 韓国(第3～6学年) |
|---|---|--|
| <p>第1 目標 総括目標</p> <p>第2 各学年の目標及び内容 第3学年及び第4学年 1. 目標(3) 理解と態度(2) 能力(1) 2. 内容(6) 3. 内容の取り扱い 第5～6学年は上記と同様。</p> <p>第3 指導計画の作成と内容の取り扱い 1. 指導計画の作成に当たった配慮事項 2. 第2の内容の取り扱いについての配慮事項</p> | <p>第一部分 前言 1. 課程性格 2. 基本理念 3. 内容の作成</p> <p>第二部分 課程目標 1. 総目標 2. 分類目標 1) 感情・態度・価値観(5) 2) 能力(4) 3) 知識(5)</p> <p>第三部分 内容標準 1. 内容標準と教授活動 1) 成長する私(9) 2) 私と学校(6) 3) 私と家庭(8) 4) 私の故郷(地域)(11) 5) 私は中国人(14) 6) 世界に向かって(8) 2. 内容標準の説明</p> <p>第四部分 課程の実施 1. 教授方法 2. 評価 3. 教材の開発と活用 4. 課程の取り扱い 5. 教材の編集</p> | <p>1. 性格</p> <p>2. 目標 総括目標 具体的な目標 1) 知識 2) 技能 3) 態度・価値</p> <p>3. 内容 1) 内容体系 2) 学年別内容 第3学年 ①単元の概要 ②教授・学習内容(6) 第4～6学年は上記と同様。</p> <p>4. 教授・学習方法</p> <p>5. 評価</p> |

文部科学省「小学校学習指導要領(社会編)」平成20年(日本), 中華人民共和国教育部「全日制義務教育品德与社会課程標準(実験稿)」2002年(中国), 教育科学技術部告示第2009-10号【別冊7】「社会科教育課程」2009年(韓国), より筆者作成。()の数は項目数である

いる。また、各学年によって、学習目標と内容を示し、第3学年と第4学年は学年の区別がないのが特徴である。中国の場合、前言、目標、内容標準、課程の実施という4つの部分からなっている。韓国の場合、スタイルには違いが見られるが、その中身は中国とはほぼ類似していることがうかがえる。また、目標と内容の設定において、日本では学年別に明確に示されているが、中国では各学年の指定がなく、一概に分類目標と6つの主題からなっている。それに対して、韓国では各学年の目標は示されておらず、学習内容のみ示されていることがわかる。

それ以外、韓国の社会科カリキュラムの中身は第3学年から第10学年までの性格、目標、内容、評価として一貫して示している。これは、日本と中国と違う韓国の大きな特徴であるといえよう。

2. 日中韓の初等社会系教科の目標の構造と特質

ここでは、日中韓の初等社会系教科教育課程の全体目標と各学年の目標を取り上げ、それぞれの国の目標を比較・分析する。次頁の表2はそれぞれの国の目標とその構造を示したものである。

日本の場合、全体目標から見ると、小学校社会科は社会生活を広い範囲からとらえ総合的に理解することを通して、公民的資質の基礎を養うことを究極的な目標としている教科であることがわかる。各学年の目標を見ると、基本的に知識・理解、関心・興味・態度、思考・判断、技能・表現などに関する目標から構成されている。具体的に、知識・理解の面では、身近な地域を中心として、より高い行政区域までに次第に拡大していくようになっているとともに、地域間と国家間の連携をも重視している。態度・価値の面では、地域の一員としての自覚を持つ、国家や社会の発展に関心を持つ、先人たちの努力や寄与を重視し、彼らの仕事の成果を尊重する、などを重視している。能力の面では、資料を活用したり、社会的事象や現象を観察、調査したり、表現活動を行ったりすることが求められている。それ以外、全体的に見ると各学年によって異なる目標が系統的、段階的に示されていることがわかる。よって、その内容はより明確になっている。

韓国の場合、各学年の目標が示されておらず、全体目標と領域別の目標からなっている。まず、全体目標から見ると、小学校社会科は社会生活に必要な知識、技能などの習得を基礎とし、様々な社会的事象や現象を正しく理解し、民主的社会の一員として必要な価値・態度を形成することを通して、民主的市民としての資質を育成する教科であることがうかがえる。次に、領域別の目標をみると、知識の面では、歴史、地理及び社会科学の概念と原理、現代の社会問題と論争問題にかかわる知識、未来社会に関する知識などの習得を重視している。能力の面では、調査、見学、観察、資料活用などを基礎とした探求力、思考力、問題解決力、情報の活用能力、意思決定力の育成を重視している。価値・態度の面では、人権の尊重、自由、平等、社会の正義、参加、責任感、義務などが含まれている。また、社会問題に関心を持ち、民主的国家的発展に寄与しようとする態度をも重視している。

中国の場合、各学年の目標は指定されていない。その全体目標から見ると、「品德と社会」科は子どもの社会生活を基礎として、良好な道徳的資質の形成と社会性の発展をともに促す総合的教科であることがわか

表2 日本・韓国・中国の初等社会系教科の目標の比較

| 全体目標 | | 具体的な目標 | |
|------|--|----------|--|
| 日本 | 社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。 | 第3・4学年 | (1) 地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるようにし、地域社会の一員としての自覚を持つようになる(地域社会の理解と態度) (2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする(地域社会の理解と態度) (3) 地域における社会的事象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする(能力) |
| | | 第5学年 | (1) 我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について理解できるようにし、環境の保全や自然災害の防止の重要性について感心を深め、国土に対する愛情を育てるようにする(国土の理解と態度) (2) 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展や社会の情報化の進展に関心を持つようにする(産業の理解と態度) (3) 社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする(能力) |
| | | 第6学年 | (1) 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする(歴史の理解と態度) (2) 日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方及び我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々とともに生きていくことが大切であることを自覚できるようにする(政治と国際理解の理解と態度) (3) 社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、年表などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味をより広い視野から考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようにする(能力) |
| 韓国 | 社会現象に関する基礎的知識と能力、地理と歴史及び諸社会科学の基本的概念と原理を発見し探求する能力を身に付け、社会の特徴と世界の様々な様子を総合的に理解し、多様な情報を活用して、現代社会の問題を創意的かつ合理的に解決し、共同生活へ自ら参加する能力を育成する。これらを基礎として、個人の発展と国家、社会、人類の発展に寄与できる民主市民的資質を養う。 | 領域別の下位目標 | (1) 社会の諸特徴を、その社会の地理的環境、歴史的発展、政治・経済・社会的制度などと関連させて理解する(知識の統合) (2) 人間と社会との相互作用に対する理解を通して、場所による人間生活の多様性を把握し、所、地域及び国土全体と世界諸地域の地理的特徴を体系的に理解する(地理領域の知識) (3) 各時代の特色を中心として、我が国の歴史的伝統と文化の特殊性を把握し、我が文化と民族史の発展像を体系的に理解し、これを基礎に人類生活の発展過程と各時代の文化的特色を把握する(歴史領域の知識) (4) 社会生活に関する基本的知識と政治・経済・社会・文化的現象に関する基本的原理を総合的に理解し、現代社会の特徴に鑑み社会生活のために解決すべき諸問題を把握する(一般社会領域の知識) (5) 社会的現象と問題を把握するのに必要な知識と情報を獲得し、組織し、活用する能力を育成し、社会生活の中の諸問題を合理的に解決するための探求能力、意思決定能力及社会参加能力を育成する(技能) (6) 個人と社会生活を民主的に運営し、我が社会が直面する諸問題に関心をもち、民族の文化及び民主的国家的発展に積極的に寄与しようとする態度を持つ(価値・態度) |
| 中国 | 子どもの良好な品德の形成と社会性の発展を促進し、社会を認識し、社会に参加し、社会に適応するとともに、思いやり、責任感、良好な行為習慣と個性を持った社会主義にふさわしい公民としての基礎を養う。 | 分類目標 | (1) 感情・態度・価値観 ① 生命を大切にし、生活を愛する。自分を大切にし、自分の意志で行い、楽観的に向上し、科学を愛し、労働を愛し、勤勉節約する態度を養う。(自分自身とかわる道徳的資質) ② 生活の中で、礼儀正しく、誠実で約束を守り、友愛で寛容かつ公平で公正な態度を持ち、集団を愛し、団結協力し、責任感のある資質を養う。(他人や集団との関わる道徳的資質) ③ 民主、法制概念とルール意識を形成する。(公民的資質) ④ 祖国を愛し、祖国の歴史、文化的伝統を大事にする。異なる国家と人々の文化の違いを尊重し、開かれた国際意識を持つ。(公民的資質) ⑤ 自然を愛し、大自然が人類にもたらしてくれた恵みに感謝の気持ちを持ち、生態環境を保護する意識を形成する。(公民的資質) (2) 能力 ① 自己を認識し、自分の情緒と行動をコントロールし、調整することができる。基本的な自己保護と自己救出技能を身に付ける。良好な生活習慣と行為習慣を養う。(道徳的能力) ② 自分の体験と考え方をはっきりと表現できるし、他人の意見を真剣に聞くことができるとともに、他人と平等に交流し、協力することができる。集団生活に民主的に参加することを社会的事象を異なる角度から観察し、認識し、分析することを学び、生活の中の問題を合理的かつ創意的に探求し解決することを試みる。生活の中で出会った道徳問題に対して、正しく判断し、選択することを学ぶ。 ④ 社会情報を収集し、整理し、分析し、活用することを学び、簡単な学習道具を活用して問題を探索し、説明することができる。 (3) 知識 ① 子どもの基本的権利と義務及び個人と集団との相互関係を理解する。社会の組織機構と社会のルールを理解して、ルール、法律が社会の公共生活にとって重要な意義を持つことがわかる。(法に関する知識) ② 生産、消費活動と人間生活との関係を理解する。人類の生存と発展における科学技術の重要な影響を知る。(産業に関する知識) ③ 一般的な地理知識を理解し、人間と自然、環境との相互依存関係を理解し、人類社会が直面している共通の諸問題を簡単に理解する。(地理に関する知識) ④ 中国において長期間にわたって形成された民族精神と優良な伝統を知る。中国の発展に影響を与えた重大な歴史的事件を知る。新中国の成立と祖国の建設における偉大なる成果を理解する。(歴史に関する知識) ⑤ 世界歴史の発展に関する重要な知識と異なる文化的背景の下での人々の生活様式や風俗習慣を知る。社会生活の中での異なる集団、民族、国家間の友好付き合いの重要な意義を知る。(世界に関する知識) |

文部科学省「小学校学習指導要領(社会編)」平成20年(日本)、中華人民共和国教育部「全日制義務教育品德与社会課程標準(実験稿)」2002年(中国)、教育科学技術部告示第2009-10号【別冊7】「社会科教育課程」2009年(韓国)、より筆者作成。(括弧内の部分は筆者による)

る。さらに、全体目標は具体化され、感情・態度・価値観、能力及び知識という3つの目標に分類されている。これらの目標からみると、中国では命、愛国主義と民族精神、伝統的な美德、倫理道德、国情（国家の事情や状況）、法、国際理解、多元文化などに関する教育を通して、子どもたちの感情・態度・価値観を発展させようとしていることがわかる。また、能力の面では、良好な行為習慣及び社会を観察し、認識することを通して、社会生活に適應する能力の育成を重視している。それによって、子どもたちの社会性の発展を促そうとしている。知識の面では、社会、経済、歴史、地理、社会常識などに関する知識が幅広く取り扱われていることが読み取れる。ここからも社会生活を総合的に理解する総合的教科としての特徴がみられる。

しかしながら、「品德と社会は学校教育で道德教育を行う主な教科としての役割を果たしている⁵⁾」と指摘されている。このことから、他の両国と比べてみると、中国の場合、国家イデオロギーの影響下で、社会が求めている公民として必要な社会認識、社会参加に関わる諸能力及び批判的思考能力、問題解決能力などの育成よりも、良好な行為習慣の形成と健全な心理的資質の育成、基本的な道德観、価値観、道德的価値能力の育成のほうがより強調されていることがうかがえる。

これに対して、日本と韓国では、日々激しくなっている社会の変化に対応させるために、人類の文化や社会問題、社会的事象などを内容領域として、子どもたちの社会認識、社会的責任感及び社会問題解決能力の育成をより重視していると考えられる。

以上でわかるように、3つの国の目標を全体的にみると、知識・理解、能力、態度・価値という3つの目標を統一させて、最終的には社会認識を通して公民（市民）的資質を育成しようとする点は共通していると考えられる。しかし、その具体的な目標の内容からみると、求められている公民（市民）的資質の中身は、各国のシステムや意識形態によって多少違いを見せていることがうかがえる。

Ⅲ. 日中韓の初等社会系教科の内容構成

ここでは、日中韓の初等社会系教科教育課程の内容を、地理領域、歴史領域、一般社会領域、道德領域という4つの領域に分けて比較を行っていききたい。なお、次頁の表3は日中韓の歴史、地理、社会領域における内容を比較して、その要約を示したものである。表4は日中韓の道德領域の内容を要約して示したものである。以下では、歴史・地理・社会領域と道德領域の2つに分けて、それぞれの内容を比較して行く。

1. 歴史・地理・一般社会領域の比較

表3から見ると、日本の場合、第3・4学年では自分たちが住んである地域社会の事象や現象についての理解、地域社会の生活変化や人々の生活様子などの理解を深めるような地域学習を中心に歴史、地理、一般社会領域を統合しようとしている、第5学年では日本の地理的環境を「面」として理解させた後、国土に見られる主な産業や社会の様子などを「点」として具体的に調べながら理解するような地理と社会領域を中心とした内容となっている、第6学年では日本の歴史と政治の働き及び日本とつながりが深い国の人々の生活の様子など国際理解に関する内容を取り扱って、歴史領域と一般社会領域を中心としている、構造となっている。このような内容構成によって、日本の社会科は小学校4年間にわたり地理領域と歴史領域の一貫性が欠如していると考えられる。

韓国の場合、第3学年では「私が生活している所」を中心とした地域学習であるが、その「所」の中の生活変化や文化、中心地、市場、交通と通信などを総合的に取り上げ、歴史、地理、一般社会の領域を完全に統合しようとしている、第4学年では子どもの生活空間を地域社会に拡大させ、地域の自然環境や生活の様子、地域の政治や経済生活における一般的なテーマを取り扱い、地理と一般社会の領域を適切に配置しようとしている、第5学年では1年間にわたって韓国史のみを学習する分科的編成となって、時系列の流れの中で学習するようにし、世界文明史に関する内容をも導入している、第6学年では子どもの生活空間の範囲を国家と世界に拡大させ、韓国の国土と環境、政治、経済、自然と文化、社会の変動に関する内容から構成され、地理領域と一般社会領域を適切に配置しようとしている。このような内容構成により、時間、空間、社会を有機的に統合させながら社会認識を追求する社会科の性格が歪んでいるといえよう。

中国の場合、各学年の内容指定もなく、それに対応する解説もない。内容は、子どもたちの社会生活を手がかりに、次第に拡大している生活領域（個人、家庭、学校、地域社会、祖国、世界）を「面」とし、社会生活の諸要素（社会環境、社会活動、社会関係など）を「点」として、「面」と「点」の相互的な結合を重視している構造となっている。そして、内容の選定において、第3・4学年では個人、家庭、学校、地域社会の領域を中心に、第5・6学年では祖国と世界の領域を中心に内容を取り扱うことが求められている。各学年ではすべての「面」の中で「点」を取り扱うよう、歴史、地理、一般社会領域の統合を強調している。しかし、内容標準の記述からみると、「故郷の自然環境と

表3 日本・韓国・中国における初等社会系教科の内容領域の比較

| 国 | 教科名 | 学年 | 内容領域 | | |
|----|-------|-----------|---|--|---|
| | | | 歴史領域 | 地理領域 | 一般社会領域 |
| 日本 | 社会 | 第3・4学年 | <ul style="list-style-type: none"> 自分たちの住んでいる身近な地域や市の様子 地域の人々の生産や販売 地域の人々の生活にとって必要な飲料水、電気、ガスの確保や廃棄物の処理 地域社会における災害及び事故の防止 地域の人々の生活（県(都、道、府)の様子) | | |
| | | 第5学年 | | <ul style="list-style-type: none"> 我が国の国土の自然などの様子 | <ul style="list-style-type: none"> 我が国の農業や水産業 我が国の工業生産 我が国の情報生産や情報化した社会の様子 |
| | | 第6学年 | <ul style="list-style-type: none"> 我が国の歴史上の主な事象 | | <ul style="list-style-type: none"> 我が国の政治の働き 世界中の日本の役割 |
| 韓国 | 社会 | 第3学年 | <ul style="list-style-type: none"> 私たちが生活している所 我が地域の整体性 我が地域の生活文化 人々が集まる所 移動と意思疎通 多様な生活の様子 | | |
| | | 第4学年 | | <ul style="list-style-type: none"> 我が地域の自然環境と生活様子 我が地域と関係深い所 様々な地域の生活 | <ul style="list-style-type: none"> 住民自治と地域社会の発展 経済生活と望ましい選択 社会変化と私たちの生活 |
| | | 第5学年 | <ul style="list-style-type: none"> 一つになった民族 多様な文化が発展した高麗 儒教の伝統が定着した朝鮮 朝鮮社会の新しい動き 新しい文物の受容と民族運動 大韓民国の発展と今日の我々 | | |
| | | 第6学年 | | <ul style="list-style-type: none"> 美しい我が国土 環境を考える国土造り 世界の様々な地域の自然と文化 | <ul style="list-style-type: none"> 我が政治の成長と課題 我が国の民主政治 情報化、世界化の中での私たち |
| 中国 | 品德と社会 | 第3学年～第6学年 | <ul style="list-style-type: none"> 故郷の変化と発展 故郷の先人やそれに関わる歴史物的物語り 我が国の何千年の歴史 近代中国の抗日闘争の歴史 新中国の成立と改革開放 世界の歴史と文化遺産 | <ul style="list-style-type: none"> 学校や地域の地理的位置 地図の活用 故郷の自然環境の特徴及びそれと生活の関係 地域の生態環境に関する問題 我が国の地理的位置、領土面積、行政区区域などへの理解 我が国の自然環境、国土の様子 我が国の異なる地域間の差異 世界の海陸分布と主な地形 | <ul style="list-style-type: none"> 家庭経済の収入と支出 地域の異なる仕事とそれらに従事している人々の労働の成果 商業、社会福祉に関する学習 我が国の民族の生活習慣、風俗などと生活との関係 多民族国家の様子 農業生産と生活との関係 工業生産と生活との関係 交通の発展と生活との関係 通信、新聞、ラジオ、テレビ、など現代の諸メディアと生活との関係 自然災害とその防止 世界の民族文化の共通点と相違点 世界経済の発展と連携 世界が直面している共通問題 世界の平和 国際連合の役割 |

文部科学省「小学校学習指導要領（社会編）」平成20年（日本）、中華人民共和国教育部「全日制義務教育品德与社会課程標準（実験稿）」2002年（中国）、教育科学技術部告示第2009-10号【別冊7】「社会科教育課程」2009年（韓国）、より筆者作成。（それぞれの国の内容はすべて要約である）

経済の特徴及び人々の生活とのかかわりを理解することを通して、故郷の変化と発展を感じ取り、故郷を愛する感情を持つ⁶⁾「我が国は数千年の歴史を持つ文明の古い国であることを知り、世界文明に対する中華民族の重大な貢献を感じ取り、民族の誇りと自信をもつ⁷⁾」のように、郷土の自然環境と人文的環境を重視して、郷土に対する帰属感、さらに祖国に対する愛情を高めるための郷土（本国）意識が強い特徴が読み取れる。全体的に見ると、歴史、地理、社会を有機的に関連させ、社会的事象や現象を総合的に理解さ

せようとしているが、実は社会生活の理解よりも、その中に含まれている道徳的認識や感情及び態度の形成をより強調していることがうかがえる。

では、各国の初等社会系教科教育課程は子どもの可能な生活をどのように構築しているのか。以下は、歴史学習を事例としてみることにする。

まず、日本と中国を見ると、両国ともある場面の切り返して過去の出来事を語る様々な学習方法を用いて、問題史学習を行っている。即ち、小学校段階の歴史学習は、子どもの現在の生活経験から出発して、歴

史的な背景をさかのぼって探求することを通して、歴史認識を高めさせようとしている。例えば、小学校中学年の内容を見ると、中国の場合、「郷土の移り変わりを感じ取り、郷土に対する愛情を芽生えさせる」「郷土が輩出した優秀な人物を理解し、彼らに学ぶ」などである。日本の場合、「古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子」「地域の人々が受け継いできた文化財や年中行事」「地域の発展に尽くした先人の具体的事例」などである。ここから、両国は、子どもの现实生活に対する認識、体験、感受などを視点として歴史学習が行われていることがうかがえる。

また、小学校の高学年では、両国とも通史学習を重視していることがわかる。中国の場合、「我が国は数千年の歴史を持つ文明の古い国であることを知り、中華民族の世界文明に対する重大な貢献を感じ取る（以下省略）」「中国共産党の指導下で救国のために列強と戦った事例及びその革命先人の事跡」を通して、中国近現代史に関する学習を強調している。日本の場合、我が国の歴史上の主な事象について、人物の働きや代表的な文化遺産を中心として、時代の各側面を重視するような「時代史学習」の方法を取りながら、系統的な通史学習を行っている。

このように、両国ともに社会とそれにかかわる知識を子どもの生活様子の中で詳しく述べることを通じて、子どもたちが歴史に興味を持つように工夫している。しかし、カリキュラムの内容から見ると、日本の歴史学習に比べて、中国の場合はその内容が漠然として取りとめがないように感じられるのが問題点であり、より具体化が必要であると考えられる。

次に、韓国の場合、学年配当から見ると、歴史教育強化の一環として、韓国史が第5学年の1学期と2学期の1年間にわたって学習するようになっていることがわかる。これは、学習期間を元（第7次教育課程）の第6学年1学期にだけ学んだ学習期間を増やすことによって、歴史教育強化の要求を反映したといえよう。また、内容は歴史的な人物の活動を中心とした日本と比べてみると、王朝の変化を単元名にし、通史としての内容を構成している。その単元名だけを見ても、国史を中心とし、韓国史の大きな流れをとらえさせる⁸⁾ことに特徴がある。具体的内容は、人物学習だけでなく、生活史と文化史の内容も重視し、過去の衣食住の文化と文化財をもって、先祖の知恵と科学文化を認識させ、子どもの生活とかわる具体的な生活様子をとりえようとしている。

以上の比較から、3つの国の社会科は総合的教科の性格を持っていることがわかる。しかし、中国の場合

は、「成長する私」「私と学校」などのような6つの主題を主な手がかりとして、子どもの心理的資質、社会生活、地理、歴史、道徳、法律、政治、経済、文化、環境などの内容を統合的に提示した総合的教科であるのに対して、日本の場合には、教科目標の基に、様々な社会機能と社会科学の知識を、公民（一般社会）、地理と歴史という3つの領域から構成された枠組みの中で展開している、即ち、社会の諸領域を系統的に統合させた総合的教科となっている。

韓国の場合、第3・4学年は地域学習以外、第5学年は歴史領域のみ、第6学年が地理と一般社会領域のみの構成によって、分科的な性格が強くなり、その構造が歪んだものとなっている。つまり、統合教科の形をとっているが、実は統合よりも分科的な性格が強くなり、独立した「歴史」領域を除いた地理と一般社会領域を統合した「社会」として構成される二次元的な構造となっているといえよう。

しかしながら、3つの国は内容編成において、社会的事象や現象、社会生活と密接にかかわる自然環境などを対象として、統合化を図ろうとしている点は共通していると考えられる。

2. 社会科と道徳教育の関連の比較

社会科と道徳教育との関連から見ると、日本の場合、昭和33年8月から「道徳の時間」が創設され以来、道徳教育は社会科とともに、お互いに補完する関係が続けてきている。つまり、社会認識を通して、社会的事象や社会生活について探求し、その中で、共感や反省、協力し合いなどを通して、道徳的な判断、態度と行動を育成している。

中国の場合、表2の目標からもわかるように、道徳教育と社会認識教育を統合させて、両者を一体化させている。即ち、子どもの社会生活から出発し、子どもと密接に関わる社会環境、社会活動及び社会関係の相互作用を通して、社会を認識させるとともに、良好な行動習慣を育成し、基本的な道徳観念と価値観及び道徳的判断能力を形成していくようにしている。

韓国の場合⁹⁾、社会認識教育と道徳教育は相互連携しながら市民性の育成をねらいとしている。しかし、道徳科は道徳の形成を通して市民性の育成をめざしているのに対して、社会科は社会認識を通して市民性の育成をねらいとしている。

このように、3つの国は社会認識教育と道徳教育の関連を明確に示しているが、中国では両者の融合という方向をとりながら、「道徳」と「社会」の2つの領域が統合され1つの教科の中で行われている。それに対して、日本の場合、両者の相互補完という方向を

表4 日本・韓国・中国における小学校(3学年～6学年)の道徳内容の比較

| 国 | 学年 | 内容領域 | | | |
|----|-----------|---|---|--|--|
| | | 自分自身とのかかわり | 他人とのかかわり | 国家、集団や社会とのかかわり | 自然や崇高なものとのかかわり |
| 日本 | 第3・4学年 | <ul style="list-style-type: none"> 自分できることは自分でやる 決めたことは粘り強くやる 勇気を持つ 正直で明るい心 自分の特徴に気づき、よい所を伸ばす | <ul style="list-style-type: none"> 礼儀を持ち、誰に対しても真心をもつ 相手への思いやり、親切さ 友達との信頼、理解、助け合い 人々への尊重や感謝の気持ち | <ul style="list-style-type: none"> 約束や社会の決まり、公徳心 働くことの大切さ 親や先生への敬愛、協力し合い 郷土や国、伝統や文化への愛、外国文化への関心 | <ul style="list-style-type: none"> 生命の尊さ、生命を大事にする 自然への愛 美しいものや気高いものへの感動 |
| | 第5・6学年 | <ul style="list-style-type: none"> よい生活習慣 希望と勇気を持つ 誠実で明るい心 真理を大切にすること 自分の特徴を知り、よい所を伸ばす | <ul style="list-style-type: none"> 礼儀正しく、真心をもつ 他人への思いやり、親切 友達との信頼、協力、助け合い 謙虚な心、意見や立場を大事に 助け合い、支えあい、感謝の気持ち | <ul style="list-style-type: none"> 公徳心、法や決まり、義務と権利 差別や偏見、正義、公正と公平 集団への参加、責任感 社会奉仕、働きの意義 親や先生への敬愛、協力し合い 郷土や国の伝統文化、外国の文化への愛 | <ul style="list-style-type: none"> 生命の重要さ、生命を尊重 自然環境を大事にする 美しいものや気高いものへの感動、畏敬の心 |
| 韓国 | 第3学年 | <ul style="list-style-type: none"> 道徳的学びの方法 貴重な生活 | <ul style="list-style-type: none"> 家族愛と礼儀 友情と礼儀 感謝の気持ちの表現 | <ul style="list-style-type: none"> 国の象徴と愛国 分断と民族の痛み | <ul style="list-style-type: none"> 生命の大切さ |
| | 第4学年 | <ul style="list-style-type: none"> 正直な生活 自分のことは自分がやる | <ul style="list-style-type: none"> 約束を守る 公衆道徳 インターネットでの礼儀 | <ul style="list-style-type: none"> 国家・民族への自負心 統一とその努力 | <ul style="list-style-type: none"> 正しい自然観 環境保護 |
| | 第5学年 | <ul style="list-style-type: none"> 最善を尽くす 反省 正しい感情を持つ | <ul style="list-style-type: none"> 近隣との礼儀 助け合い 対話と葛藤 ゲーム中毒 | <ul style="list-style-type: none"> 北朝鮮の同胞と脱出民への理解 在外同胞への関心 | <ul style="list-style-type: none"> 真の美しさ |
| | 第6学年 | <ul style="list-style-type: none"> 自負心と自己開発 責任感 勇気ある行動 | <ul style="list-style-type: none"> 他人への思いやり 社会奉仕 | <ul style="list-style-type: none"> 偏見と寛容 平和の世界 追求する統一の様子 違法とルール守り 公正な行動 | <ul style="list-style-type: none"> 愛と恵み |
| 中国 | 第3学年～第6学年 | <ul style="list-style-type: none"> 自分を知り、自分のよさを伸ばす 自信、自尊、自愛、恥を知る 自分の名誉を愛する 合理的消費、勤儉節約 自分の生活と行動を反省する 学びの中の困難の克服、学びへの態度 圧力、衝突、挫折、調節の方法 誠実 良好な学習習慣 不健康な生活違法行動への正しい態度 時間を大事にする | <ul style="list-style-type: none"> 他人のよさを知り、尊重する 他人への寛容 約束の守り 家族への責任感 家族や先生などへの尊敬、関心、愛 友達との友愛、理解、信頼、友好的な交流 助け合い、平等 健康で文明的な生活 家族や近隣との友好的な交流 | <ul style="list-style-type: none"> 安全常識、法律、規則の守り 集団への参加、協力と分かち合い ルール意識 公平、公正、民主、平等な生活 故郷や祖国への愛 消費者としての自己保護意識 公共施設への愛 公共秩序を守る 不良習慣、迷信との戦い 民族の自負心と誇り 民族団結 | <ul style="list-style-type: none"> 生命を大事にする 環境保護意識と参加意識 文化への尊重と鑑賞 科学を愛し、崇拜する 平和を愛する 民主意識 |

文部科学省「中学校学習指導要領解説(総則編)」平成20年(日本)、中華人民共和国教育部「全日制義務教育品德与社会課程標準(実験稿)」2002年(中国)、教育人的資源部告示第2007-79号「初等学校教育課程解説(Ⅲ)-国語、道徳、社会-」2008年(韓国)、より筆者作成。(それぞれの国の内容はすべて要約である)

とっている。しかも、「道徳」は教科ではなく、特別活動(学級活動、児童・生徒会活動、クラブ活動、学校行事)と同じように「領域」として位置づけられている。これらと異なって、韓国では日本のように両者は相互関連しながら並行しているが、社会科と道徳科のようにそれぞれ1つの独立した教科として位置づけられている。これは韓国独自の特徴であろう。

表4で見られるように、道徳の全体的な内容は、3つの国ともほぼ類似して、自分自身とのかかわり、他人とのかかわり、国家・社会とのかかわり、自然とのかかわりという4つの領域から構成されている。

また、道徳領域の自分自身・他人・国家・社会との

かかわりといったような内容を見ると、社会科の対象である様々な面での社会生活と類似していることがわかる。例えば、日本の場合、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚を持ち、自他の人格を尊重し、社会的義務や責任を重んじ、公正に判断しようとする態度や能力などの公民的資質の基礎を養うことは、主として集団や社会とのかかわりに関する内容と密接なかかわりを持つものである。このことから考えると、日本と韓国の場合、社会科と「道徳」の内容が重複しており、これは社会科の役割を狭めているといえよう。

IV. 日中韓の初等社会系教科の学習方法

では、各国ではどのような学習方法で上記のような目標を実現しようとしているのだろうか。以下では、社会科カリキュラムの記述を中心に比較していく。

まず、能力に関する目標から見ると、日本の社会科は子どもたちの具体的な経験を通して、観察、分析、資料の活用、調査、発表などの探求的な活動を行うことを通して、探求能力を育成しようとしている¹⁰⁾。そのため、体験学習、探求学習、交流、討論などの様々な学習活動を展開して、子どもの自主的学習を重視している。また、実際の授業では、問題解決的な学習、観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し的確に記録する学習、それらを比較・関連付け・総合しながら再構成する学習、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習など言語活動を行うこと¹¹⁾が求められている。

次に、韓国では、教授・学習方法において強調すべき点として、「思考力と意思決定力の伸長を強調し、そのために子どもは様々な探求方法を活用して、探求していく学習を志向する。したがって、発見学習、探求学習、問題解決学習、価値分析学習、意思決定学習など多様な学習方法を各領域の内容に応じて適切に行わなければならない¹²⁾」と示している。

最後に、中国では、「子どもたちの生活環境から出発して、社会を観察し、体験し、感じ取るようにし、活動の中で探求し、探求の中で問題を発見し、解決するような学習活動を通して、子どもの創造力と思考力、実践力を高めていく¹³⁾」ことを重視している。

以上から、3つの国は、子どもたちが調査や理解などの学習方法、体験学習や問題解決学習などの学習活動を通して、自主的に学び、自主的に思考・判断するような能力を形成し、社会に関心を持ち、社会活動及びその意義について多方面で思考するように工夫している点においては共通していると考えられる。

V. 日中韓の社会系教科教育課程の特質

本研究では、小学校に焦点を当てて、日本と中国及び韓国の初等社会系教科教育課程の構造とその特質を明らかにすることを目的とした。そのため、主に教科構造、目標、内容、学習方法についての比較を行った。

その結果を以下の4点にまとめることができる。

第1に、社会系教科の構造から見ると、3つの国は第1～2学年では「生活」、第3～6学年では「社会」の系統として設置されている。しかし、日本と韓国の場合、「生活」と「社会」は「道徳（韓国の場合は「正

しい生活）」と併置構造として設置されているのに対して、中国の場合、「品徳（道徳）と社会」のように融合された構造として設置されている。

また、初等社会系教科教育課程の全体構造は、日本の場合、各学年の目標と内容を明確に示している。中国の場合、目標と内容は各学年の指定がない。しかし、韓国の場合、各学年の目標は示されておらず、学習内容のみ示されている。

第2に、初等社会系教科教育課程の全体目標の構造から見ると、3つの国は目標の多元化、総合化と均衡化に向かって、知識・理解、態度（感情・価値観）、能力の統一的な育成を目指して、それぞれに関する目標から構成されている。また、最終的には社会認識を通して公民（市民）的資質を育成しようとしている。しかし、大きな違いは見られないが、求められている公民（市民）的資質の中身は、各国のシステムや意識形態によって多少違いを見せている。

また、目標の示し方からみると、中国の場合、「品徳」と「社会」を一体化させ、感情・態度・価値観、能力、知識という分類目標の形で示し、学年の目標は指定されていない。また、感情・態度・価値観に関する目標はより明確であるが、能力や学習方法に関する目標は欠如している。韓国の場合、第3学年から第10学年にわたっての総目標を示しており、各学年の目標は指定されていない。それに対して、日本の場合、各学年の目標をはっきり示しており、学習方法や技能に関する目標は明確である。

第3に、初等社会系教科教育課程の内容の構造から見ると、まず、3つの国の社会科は歴史、地理、一般社会領域の総合性を図る教科としての性格を持っている。しかし、韓国の場合は、領域間の統合は弱められ、学年によって分科的性格が強くなっている。日本の場合も、小学校4年間にわたり地理領域と歴史領域の一貫性が欠けている。このことから、日本と韓国では、時間、空間、社会を有機的に統合させながらも社会認識を追求する社会科の性格を弱めていると考えられる。

それに対して、中国の場合、子どもの生活領域と社会生活の諸要素を相互的な結合しながら、歴史、地理、一般社会領域の統合を強調している。しかし、全体的に見ると、社会生活の理解よりも、その中に含まれている道徳的認識や感情及び態度をより強調している。

次に、社会科と道徳教育との関連から見ると、日本と韓国では両者の相互連携を図りながら市民性の育成をねらいとしている。しかし、中国の場合、両者を統合して一体化させ、良好な行動習慣の形成と社会性の発展をともに重視している。

つまり、3つの国は社会認識教育と道徳教育との関

係が明確に示されているが、教科の構造からみると、中国では「融合」という形で、「道徳」と「社会」の2つの領域が統合された1つの教科の中で行う。それに対して、日本では「相互補完」という形で、「道徳」を領域としてとらえ、1つの教科と1つの領域との関係で行う。しかし、韓国では「相互関連」という形で、「道徳」を教科としてとらえ、それぞれ1つの独立した教科の中で行う。

それ以外、道徳の全体的な内容は、3つの国ともほぼ類似し、自分自身、他人、国家・社会、自然とのかわりという4つの領域から構成され、社会科の対象である様々な面での社会生活と類似している。このことから考えると、社会科と「道徳」が併置構造となっている日本と韓国においては、内容の重複が多く、これは社会科の役割を狭めるとうかがえる。

第4に、学習方法から見ると、3つの国は社会生活に関する観察、見学、調査などの学習方法を活用して、自主的学習、問題解決学習、探求学習、発見学習などの学習活動を行うことを重視している。しかし、その学習方法の重点においては違いがある。日本では、問題解決学習が重視されているのに対して、中国と韓国では多様な探求学習を重視している。

本研究で比較対象として取り上げたのは日中韓の初等社会系教科教育課程のみである。しかし、カリキュラムというのは、あくまでも意図レベルのものに過ぎず、3つの国の初等教育における社会科の現状には必ずしも一致しているとは限らない。そのため、中身をより確認するためには3つの国で現在使用されている教科書や行われている授業実践などについての比較的分析も必要であると考えられる。そこで、今後は3つの国の実施レベル及び達成レベルのカリキュラムはどうなっているのかに関する更なる研究を行うことを課題として残したい。

【注】

- 1) 小学校新学習指導要領は、2011年4月から実施予定である。
- 2) この課程標準は、2002年6月に教育部により告示され、2005年の秋までに全国的に普及される予定であった。
- 3) 改訂された教育課程は、初等学校段階において、2009年3月1日に1・2学年、2010年3月1日に3・4学年、2011年3月1日に5・6学年の順で施行される予定である。
- 4) 本研究で比較対象となる教科は、その名称から見ると、日本と韓国では「社会」、中国では「品德と社会」である。名称が異なるため、本研究では社会系教科という用語で統一する。
- 5) 李稚勇主編『品德与生活品德与社会 課程与教学』高等教育出版社、2006年、p.87。
- 6) 中華人民共和国教育部制訂『全日制義務教育品德与社会課程標準(実験稿)』北京師範大学出版社、2002年、p.11。
- 7) 同上、p.13。
- 8) 韓国教育課程評価院『社会科教育課程改訂試案研究公聴会』(研究資料ORM2005-58)、2005年、p.106。
- 9) 韓国の社会科と道徳科の関係についての詳しいことは、朴南洙「韓国における初等社会科の構造と特質 - 『2007年改定社会科社会科教育課程』を中心に - 」全国社会科教育学会『社会科研究』第69号、pp.61～70、2009年、をご参考させたい。
- 10) 北俊夫・片上宗二編著『小学校新学習指導要領の展開(社会科編)』明治図書、2008年、pp.212～216、をご参照させたい。
- 11) 文部科学省『小学校学習指導要領解説(社会編)』東洋館出版社、2008年、p.5。
- 12) 教育人的資源部告示第2007-79号による『初等学校教育課程解説(Ⅲ)』教育科学技術部、2008年、p.307。
- 13) 同上書6)、pp.18～19。

(主任指導教員 小原友行)